

【共同研究】

『感情イメージ調査』についての研究（Ⅱ） —諸対象についての感情価尺度の因果論的構造と性格次元との関連性—

鈴木 賢男* 大石 昂** 松野 真*** 堀内 正彦****
鈴木 国威***** 藤森 進***** 岡田 斉*****

Research on the Questionnaire on Affective Imagery 2nd Report—Causal structure of scales about object's word weighted effective value and relation to personality traits

Masao SUZUKI, Takashi OISHI, Makoto MATSUNO, Masahiko HORIUCHI
Kunitake SUZUKI, Susumu FUJIMORI, Hitoshi OKADA

This is the 2nd of two reports analyzing a questionnaire called the Questionnaire on Affective Imagery (QAI). The QAI is a list of paired words with a rating scale. The left word of each pair is the “object word” (32); self, father, mother, family, social, and so on. The right is the “affective word” (8); joy, hope, love, astonishment, sorrow, fear, anger, and disgust. Takashi Uesugi wrote six research papers as lifelong studies on the original questionnaire (1981, 1982, 1983, 1989, 1998, and 2000). We argued for the stability of the structure of affective imagery in current and former college students in the 1st report. We concluded that subjects displayed the same structure of affective imagery, even after the passage of a great deal of time, and then progressed to putting QAI to practical use. In this study, we examined the causal structure of scales about object's word weighted affective value, and the relation to personality traits, for verification and coordination with other findings.

Subjects were 77 male and 79 female students at Bunkyo University. The results of the study were, firstly, a model that the scales comprising affective imagery (positive/negative image) of the cause-object (e.g., father, mother, relatives) influenced that of the result-object (e.g., job, death, art, journey) confirmed by analysis of covariance structures. Secondly, those scales were found to be related to several personality traits in NEO-FFI (Big Five Personality Inventory).

The results demonstrated that the devised questionnaire was a useful instrument and the calculated “affective values” were a useful measure to know the levels of positive or negative affect.

*	すずき まさお	文教大学人間科学部非常勤講師
**	おおいし たかし	富山国際大学子ども育成学部
***	まつの まこと	千葉県健康福祉部児童家庭課
****	ほりうち まさひこ	駒澤大学文学部
*****	すずき くにたけ	慶応大学先端研究センター
*****	ふじもり すすむ	文教大学人間科学部心理学科
*****	おかだ ひとし	文教大学人間科学部臨床心理学科

はじめに

本研究は、昨年度の『感情イメージ調査』についての研究』に引き続く第Ⅱ報である。感情イメージ調査票は、故 上杉喬先生が文教大学に赴任後間もなく開発した質問紙法であり、同じ感情(ex. 喜び)として扱われながらも、その感情が向けられる対象(ex. 友人, 仕事など)の違いによって、感情的意味は変わってくるのではないかと、という直観的な疑問に答えるものとなっている。ここでいう感情とは対象との体験的な関わり方によって意味づけられているものであり、現前の対象に対して特定の情動反応が生じるということや、個別の感情には特有の主観的体験が伴うということを中心にして感情を考えているわけではない。

上杉(1981)は、この対象関係的な感情の特徴を、複数の感情の連関性が変わることをもって示している。「驚き」という感情が最も典型的であるが、ある対象(ex. 芸術)の場合には、驚きは、喜びや愛と同方向の関係をもち、別の場合(ex. 死)には、怒りや恐れと同方向として感じられるものとなる。これらは、前述の感情イメージ調査票による結果から明らかにされているが、調査項目の提示方法に工夫がされており、まず感情語と対象語を一つずつ組み合わせランダムに対提示し、双方から個別に喚起(もしくは想起)されたイメージ(漠然とした意識)を照合させ、主観的なく近さ-遠さ>を評定させることで、このような特徴を丹念に分析できるのである。

一方、上杉(1981)では、この調査で測定されている内容を「感情イメージ」として命名している点にも、一定の留意をしておきたい。上杉(2004)は、「感情」を引き起こした出来事が消失した後での感情状態や、その場面をイメージして喚起した感情状態はいわゆる「感情」とは様々な違いがあると述べており、そこに、対象についての記憶や思考という心理過程の所産としての別様の感情状態を認め、これを「感情イメージ」と呼ぶことで、外的刺激によって直接的に賦活された情動反応、およびそれに伴う主観的体験との区

別を記した。対象のイメージと内的に結びついてきた感情状態(例:Aさんから感じてきた愛)は、その対象の感情的意味として記憶・認知され(例:Aさんは自分のことを愛してくれる人である)、時に、現前の対象に対しての感情にも影響を及ぼし(例:Aさんに怒られて、最初はムカついたけど、きっと愛情あつての事なのだろうなあ)、感情の変容や強弱を左右することにもなるのである。

このように感情イメージというものをとらえてみれば、上述した複数の感情の連関性が生じることに、一定の説明力を与えることになる。対象を現前とした情動反応の方は、出来事に応じて刻々と切り替わるものであり、仮に連合的な結びつきを考えると、そこに、感情間の複合的な関係を見出すことができなくなってしまうであろう。また、上杉(1981, 1982, 1983, 1989)は、このような対象による感情構造の違いに着目しながらも、諸対象(この場合は、被験者の日常生活を取り巻く身近な対象)に共通する感情イメージの一般的な連関構造があるとの仮定をし、約10年間の範囲内において、その構造が、被験者間で同様であったことを見出し、身近な諸対象に対しては共通した感情イメージ構造が十分な安定性を持っていると結論した。

前回調査(2008)では、その当時からおおよそ20年経過した現在においても、上杉のものと同様な構造が認められるものかどうか、感情語間の連関が異なる時代の世相や社会的状況から影響されずに安定しているかを確認するために、感情イメージ調査票を復元し、これを実施した。上杉にならない、まず、32対象の違いを区別することなく同列に扱い、8感情(喜, 望, 愛, 驚, 悲, 怒, 恐, 嫌)の評定値に対する因子分析を実施したところ、今までと同様に、主因子解の第1因子が2極性であること、各感情の因子負荷量の大きさがほぼ等しいこと、感情間での相対的順位(負荷量の大きさの順番)が保たれていることを認めることができ、一般的な感情イメージ構造が年代を経ても安定性をもつものであることを示唆するものとなった。

そこで今回調査では、1年後に入学した被験者に前回同様にして分析を行い、同様な構造、同程

度の負荷量が得られるかどうか、なおかつ、過去のものとは比べて、直近のデータの方がより一致性が高くなるかどうかを検討する。更に、男女別に対象語ごとにもとめられた8感情の評定値に対する「感情価」（対象に対するポジティブさを示すと考えられる値）を算出し、性別による感情価の違いを明らかにする。また、各対象の感情価に対して因子分析を行い、連関性の高い対象の因子を得ること、そして、同一因子の感情価を合計することで、これを一種の尺度得点とし、これらの間に逐次的な一方向のパスが想定できるような因果論的モデルを構築すること、並びに、モデル内の所定の尺度得点と特定のパーソナリティ特性（次元）との固有の関係を導き出して、感情イメージ調査法の更なる有効性を検討する。以上のことを研究Ⅰ～Ⅲの目的とした。

方 法

1. イメージ調査法

イメージ調査法では、上杉（1979）によって開発された独自の調査用紙（イメージ調査票）が用いられた。この調査票は、感情研究としてのSD法と、創造性開発技法としてのKJ法（川喜多次郎, 1965）からヒントを得ているものであり（上杉1981）、対象語（ex.私、父、母など）と感情語（ex.喜、愛、悲など）を対にして示し、対象語の具体的内容（すなわち、各人の体験の中にイメージとして存在している内容）としての「対象」をイメージさせ、その「対象」のイメージと、感情語からイメージされる感情イメージの<近さ—遠さ>を、5段階で主観的に評定してもらうものである。

採用した対象語は、昨年度の調査同様、上杉（1989, 2000）と同じもので、学生を取り巻く諸対象を表す32語、感情語については、感情イメージ調査が行われて以来、一貫して用いられている漢字一文字による8語を用いた（Table 1）。この感情語は、水島恵一（1979, 1980, 1981）によるカード式投影法（図式的投影法）の感情カードで使われていたものを元としている。対象語と感情語の対は256対となるが、その一部をTable 2に表した。なお、対象語と感情語の対提示の順

番は、改めて無作為に決定し、昨年度とは異なる調査用紙を作成した。

Table 1. 感情語と対象語

【感情語】 8							
喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌
【対象語】 32							
私	父	母	夫	妻	兄弟	姉妹	恋人
友人	仲間	家族	家庭	親類	近隣	学校	集団
職場	社会	仕事	勉強	生活	遊び	趣味	旅
健康	病気	生	死	文化	芸術	人類	自然

Table 2. イメージ調査票（その一部）

			近い	やや近い	えど なち いら とも い	やや遠い	遠い
1. 私	嫌						
2. 芸術	恐						
3. 死	驚						
4. 父	愛						

2. 対象者

対象者は、文系のX大学大学生であり、男性77名、女性79名、計156名であった。平均年齢は、男性が18.5才（SD=0.90）、女性が18.2才（SD=0.38）となっており、ほぼ全員が1年生であった。

3. 手続き

調査実施時期は、授業開始後の2週間後、2009年4月15日と4月27日で、それぞれ2コマずつ別々のクラスで、調査票を一斉に配布し記名した上でその場で回答してもらった後、即回収をした。調査用紙に記載された教示は次の通りである。

次のページから、全部で4ページにわたって、1～256のことばの対があります。左側はいろいろな対象や事象を表していることばです。右側のことばは、感情語です。

各対について、左側の対象や事象を具体的にイメージしたとき、あなたにとって右側の感情が「近いもの」であるか、「遠いもの」

であるか、そのびったりするところに、○印をつけて下さい。

研究Ⅰ 感情の因子構造と感情価の男女差

1. 目的

前回2008年の調査では、諸対象の区別をしない場合、感情語への評定についての主因子解とその回転解における結果が、上杉（1981, 1982, 1983, 1989）のものと比較され、同様に、主因子解で2因子が抽出されたこと、第1因子にプラスとマイナスの2極構造が現れたこと、そして、8感情のうち「喜」「望」「愛」「悲」「怒」「嫌」の6つの感情で、因子負荷量の絶対値の差が0.1以下に収まっていたこと、また、負荷量の大きさの順番が概ね保たれていたことから、異なる世代と思われる20年後の対象者においても類似性が確認され、身近な対象に共通する一般的な感情構造に十分な安定性があることが示唆された。しかしながら、「驚」「怒」においては、比較的変動が大きいことも認められており、時代性のような社会的背景の変化やその他の条件により、対象に対する感情イメージ構造が部分的に変わる可能性があることも予期できるものとなった。したがって、研究Ⅰでは、時代としては直近となる昨年と本年における感情イメージの因子構造とを改めて比較すること、8感情の評定値に重みづけして合成された32対象の感情語のいずれに性差が生じるものかを調べることで、感情イメージの全般的な不変性と部分的な可変性についての検討を試みることにした。

2. 分析

(1) 諸対象に共通する一般的な感情構造をもとめるために、8感情（8変数）を“列”とし、対象32×調査対象者156=4,992件を“行”とするマトリックスを構成し、8感情間での相関行列を得ることで、因子分析を行った。固有値1.0以上を基準とした主因子法による2因子を抽出し、その後、回転バリマックス解を得た。累積寄与率は、49.9%であった。

(2) 32対象語ごとに、8感情（8変数）を“列”、男性で77人（件）、女性で79人（件）を“行”とするマトリックスを構成し、8感情間での相関行列を得ることで、固有値1.0以上を基準とした因子分析を行い、男女別なおかつ対象語ごとの8感情についての主因子解をもとめた。抽出された因子数は、ほとんど2つであったが3因子となるものもあった。累積寄与率は、37.7%（女性の「自然」）～60.8%（女性の「姉妹」）の範囲内であった。

(3) 主因子解で正負2極の構造が見られる因子（多くは第1因子）の因子負荷量を重みづけとして、8感情の合成得点としての「感情価」 T_{ij} をもとめた。 T_{ij} は対象 j に対する調査対象者 i の感情価で、

$$T_{ij} = (\sum W_{jk} \times t_{ijk}) \div \sum |W_{jk}| \times 10$$

として定義される。ここで、 W_{jk} は対象 j に対する感情 k の重みづけであり、男女別にもとめられた32対象語の8感情についてのそれぞれの因子負荷量を意味している。因子負荷量を利用した実際の重みづけは、Appendix 1に示した。 t_{ijk} は調査対象者が対象 j をイメージして、感情 k との<近さ-遠さ>を評定した点数で、「近い」=+2点、「やや近い」=+1点、「どちらともいえない」=0点、「やや遠い」=-1点、「遠い」=-2点として数量化したものである。これにより、変換値としての「感情価」は+20～-20に分布することになった。

(4) 対象語ごとにもとめられた「感情価」による32対象間の相関行列に対して、最尤法による因子分析を行い、固有値1.0以上を基準として5因子を抽出したのち、回転バリマックス解を得た。累積寄与率は63.8%であった。適合度検定の結果、因子数は有意であった（ χ^2 2値567.9, 自由度346, $p=0.00$ ）。因子数を4, 6, 7と固定した場合の解とも比較したが、固有値基準の5因子が、最も解釈の容易なものであったので、これを結果として採用した。

(5) 同一因子内の対象語についての感情価を合計した後、その因子を構成する対象語の数で割ることにより、1対象分に換算された感情価を算出し、5因子ごとの感情価の平均値を男女別にもとめた。男女の平均値の差が有意であるかどうかにか

ついては、t検定を行った。

3.結果

(1) 因子分析の結果を、前年のものとともに Table 3に示した。本研究において抽出された主因子解の第1因子負荷量には、正負の符号（＋と－）双方が認められ、この因子が両極的な軸を示しており、一側に感情語の「喜（-.73）」「望（-.67）」「愛（-.57）」、＋側に「嫌（.75）」「悲（.68）」「怒（.62）」「怒（.49）」、そして「驚（-.08）」は0に近い値になっていることがわかった。また、第2因子負荷量は、「望（.48）」を筆頭に、同符号の一極的な軸を示しており、「驚（.44）」「喜（.42）」「恐（.38）」「怒（.37）」「悲（.33）」「愛（.30）」「嫌（.22）」と続いていることがわかった。前年の因子負荷量との差異を算出してみると、第1、第2因子とも.10以内になっていて、値にほとんど変化のないことが確認された。また、負荷量の大きさの順位を比較すると、第1因子では前年と変わりなく、第2因子では、「驚」と「望」、「悲」と「愛」が直前直後で入れ替わっているだけで、ほぼ同じ順番を示

すものとなっていた。

(2) 一方、回転バリマックス解では、一方の因子において、負荷量の値が正の同符号となっているものは「恐」「悲」「怒」「嫌」で、絶対値が.61～.74程度あり、負の同符号となっている「喜」「愛」「望」では、絶対値が.18～.31程度となっていた。「驚」は正符号であるが、絶対値は比較的小さく.21であった。もう一方の因子においては、「喜」「望」「愛」が正の同符号で絶対値が.59～.78程度であり、負の同符号は「恐」「悲」「怒」「嫌」で絶対値は.00～.30程度であった。「驚」は、正符号で前者より比較的大きい.40であった。

これを、前年調査による因子負荷量とともに、回転解の二つの軸にプロットしてみたものが、Figure 1である。これによると、「喜」「望」「愛」は第4象限、「嫌」「恐」「悲」は第2象限、「驚」が第1象限に、「怒」が垂直軸上に重なっており、兩年とも同様にプロットされていることが認められた。

Table 3. 全対象語に対する因子負荷量

対象年度 (対象者)	2009年 (大学生156名)		2008年 (大学生124名)	
	F1	F2	F1	F2
主因子解				
1.喜	-0.73	0.42	-0.69	0.50
2.望	-0.60	0.48	-0.56	0.52
3.愛	-0.57	0.30	-0.49	0.35
4.驚	-0.08	0.44	0.02	0.52
5.悲	0.68	0.33	0.68	0.33
6.恐	0.62	0.38	0.65	0.41
7.怒	0.49	0.37	0.44	0.38
8.嫌	0.75	0.22	0.74	0.19
Varimax解				
1.喜	-0.31	0.78	-0.20	0.83
2.望	-0.18	0.75	-0.10	0.75
3.愛	-0.26	0.59	-0.15	0.59
4.驚	0.21	0.40	0.35	0.39
5.悲	0.74	-0.17	0.73	-0.18
6.恐	0.72	-0.09	0.76	-0.10
7.怒	0.61	-0.01	0.58	0.01
8.嫌	0.72	-0.29	0.69	-0.33

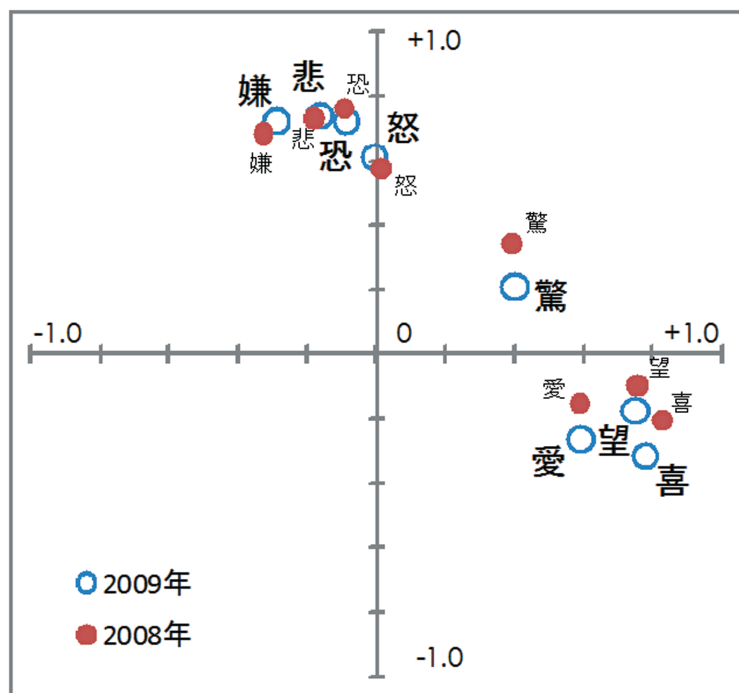


Figure 1. 感情語の因子負荷量のVarimax解プロット

(3) 32対象語ごとの感情価の全体および男女別の平均値と標準偏差をTable 4.の右側に示した。感情価の大きさは、+20に近づけば調査対象者の諸対象に対する全体としてのプラス感情のイメージが強く、-20に近づけば、その対象に対するマイナスの感情イメージが強いことを示している。この感情価を指標とする32対象語の回転バリマックス解における因子負荷量を同Table 4.の左側に示した。

第1因子は、「家族」「家庭」「母」「近隣」「兄弟」「夫」「生活」「私」「社会」「父」「姉妹」「親類」「妻」の13対象から構成されるもので、衣食住などの日常生活の基盤となるような家庭、およびその周縁あるいは近縁で、生活を共にしている“共同体的対象”と呼べるものであった。第2因子は、「芸術」「旅」「趣味」「文化」「自然」の5対象からなるもので、非日常的な刺激に満ちた事物を構成している“情操的对象”と呼べるものであった。第3因子は、「職場」「仕事」「集団」「学校」「勉強」「恋人」の6対象からなり、一定の目標達成や適応することとを必要とする“課題的对象”、第4因子は、「病気」

「死」「遊び」「健康」「生」の5対象で、活動しているあるいは活動できることの実感を増したり損なったりすることに影響する“生命的対象”と命名することとした。第5因子は、「仲間」「友人」「人類」の3対象で、集いあって共に語り共に活動することで互いに共感絆を形成することを意味する“親和的对象”とした。

Table 4. 32対象語の感情価と因子負荷量

対象語	因子負荷量（バリマックス解）					感情価					
						全体(N=156)		男性(N=77)		女性(N=79)	
	F1	F2	F3	F4	F5	平均	SD	平均	SD	平均	SD
家族	.86	.20	.18	.32	.09	12.0	7.15	11.7	7.23	12.3	7.11
家庭	.79	.24	.25	.38	.13	11.6	7.31	11.2	7.38	12.0	7.27
母	.76	.20	.10	.17	.13	10.5	7.00	9.8	7.37	11.1	6.60
近隣	.58	.36	.09	.05	.25	9.4	6.30	8.8	6.72	10.1	5.85
兄弟	.57	.43	.17	.21	.20	11.1	6.74	10.3	7.17	11.8	6.27
夫	.57	.43	.22	.33	.29	10.9	6.57	10.3	6.70	11.4	6.44
生活	.55	.20	.54	.30	.24	9.6	6.46	10.3	6.63	9.0	6.28
私	.54	.15	.34	.01	.11	4.9	8.29	6.6	8.73	3.2	7.53 *
社会	.53	.01	.46	-.14	.25	3.7	7.29	4.4	7.53	2.9	7.03
父	.50	.19	.08	.19	.16	6.5	8.06	7.8	7.40	5.3	8.52
姉妹	.48	.36	.25	.23	.20	9.6	7.02	9.1	6.49	10.1	7.50
親類	.48	.48	.25	.32	.23	11.6	6.94	10.4	6.06	12.8	7.57 *
妻	.39	.31	.38	.31	.16	9.5	6.91	10.3	6.48	8.6	7.26
芸術	.20	.66	.06	.13	.26	9.7	6.44	8.5	6.57	10.9	6.14 *
旅	.18	.64	.15	.41	.10	11.8	6.04	10.7	6.13	12.8	5.80 *
趣味	.19	.63	.28	.54	.00	13.6	5.76	13.2	5.96	14.0	5.57
文化	.27	.61	.24	.01	.07	7.6	5.33	6.7	5.77	8.5	4.74 *
自然	.37	.46	.14	.06	.34	9.1	6.20	8.6	6.27	9.6	6.14
職場	.11	.06	.80	.02	.12	3.9	6.71	5.3	6.34	2.6	6.83 *
仕事	.17	.32	.61	.18	.25	5.9	7.14	4.5	6.67	7.3	7.35 *
集団	.48	.06	.55	.16	.36	6.7	7.93	7.9	7.47	5.7	8.25
学校	.35	.25	.53	.20	.46	9.4	7.30	9.1	6.70	9.6	7.87
勉強	.10	.32	.51	-.11	-.15	2.9	7.57	2.8	7.85	3.0	7.35
恋人	.32	.31	.42	.38	.28	12.4	6.23	12.3	6.82	12.4	5.65
病気	-.07	-.09	.03	-.64	-.01	-11.4	7.29	-9.7	7.51	-13.0	6.71 **
死	-.18	-.04	.03	-.62	-.20	-11.2	7.08	-9.8	6.59	-12.6	7.30 *
遊び	.25	.47	.28	.60	.28	13.3	5.58	12.5	5.74	14.1	5.35
健康	.34	.43	.14	.51	.14	14.2	5.61	14.0	6.03	14.4	5.18
生	.42	.16	.42	.50	.37	11.1	7.09	11.3	7.12	10.9	7.11
仲間	.39	.27	.31	.30	.70	12.8	6.34	12.3	6.16	13.4	6.50
友人	.50	.36	.19	.35	.59	13.2	6.19	12.8	6.10	13.5	6.30
人類	.37	.34	.25	.24	.50	7.8	7.72	7.7	7.22	7.8	8.22

注)***は0.1%, **は1%, *は5%水準で有意な差を示したことを示す

(4) 上記因子ごとに、因子を構成する対象語の感情価を合計したものを、対象の数で割り、1対象あたりの感情価に平均化したものを算出すると、全体では、最も高い感情価を示したものが、12.3 (SD=5.03) のF4.生命的対象であった。次いでF5.親和的对象11.3 (6.21)、F2.情操的对象10.5 (4.69)、F1.共同体的对象9.4 (5.46) で、最後がF3.課題的对象6.8 (5.26) であった。

また、この因子ごとの感情価の平均値を男女別にもとめたところ、F4.では、男性が11.4 (SD=5.03) で女性が13.1 (SD=4.93)、次に、

F2.は男性9.8 (4.81)・女性11.1 (4.48)、F5.は男性10.9 (6.01)・女性11.6 (6.41)、F1.は男性9.5 (5.67)・女性9.4 (5.29)、そして、F3.は男性6.9 (5.11)・女性6.8 (5.42) であることがわかり、それぞれの平均値の差に対してt検定を行ったところ、5%水準で有意な差が認められたものは、F4.生命的対象 ($t=-2.05$, $df=146$, $p=0.04$) のみとなった。

4.考察

(1) 本研究と前年の諸対象に共通する感情イメー

ジの因子構造を比較したところ、主因子解の第1因子、第2因子とも、感情語の因子負荷量の変動が全て.10以下となっていることや、値の大きさの順番がほぼ同一であったことから、感情イメージは同一の構造を表し、全ての感情語において同程度の連関性をもっているものと考えることができた。したがって、諸対象に共通する感情イメージ構造に関しては本年の対象者においても変化していないことが示唆されるであろう。前年調査で「驚」と「怒」は、およそ20年前の上杉による分析結果との間に、比較的大きな差異を認めるところとなったが、本年度のものとの間には、差異が認められなかったわけである。このことは、感情イメージ構造における感情間の連関性の程度が、所属が同一であれば、直近の年代間ではかなりの程度一致することを予見させるものとなった。

逆に、年代に開きがある場合には、一部の感情語が、他の感情語との連関性に変動をもたらす可能性があり、身近な対象に対する感情生活といえども、それらの背景としてある世代や世相などの時代性に、一定程度影響されることがあるのではないかと考えることもできた。バリマックス解のプロット図 (Figure 1.) によってより顕著になったことだが、「驚」感情が、上杉 (1981, 1982, 1983, 1989) の研究においては、弱いながらもマイナス感情との連関性を示していたものが、前年調査からは、比較的ポジティブな感情との連関性を強めるような変異をしており、「怒」感情ではネガティブ性を弱めている。しかしながら、こうした部分的変動が、時代性などの要因による影響だとしても、感情イメージ調査のみでは、具体的な要因を示唆するような根拠を得ることはできない。

(2) 感情価に基づいた因子分析の結果は、因子を構成する対象語が、実際の物理的環境を近しくしているものであること、また、目標や目的を共有しているものであることから、社会集団そのものを形成する合目的単位として再定義することも可能となっている。F1.共同体的対象は、衣食住を中心として、周辺事情や環境を等しくしながら基本的な生活を相互に支えるための集合体 (類縁的社会集団)、F3.課題的对象は、特定の問題の克

服や特殊な目標の達成・成就をめざしたり、あるいはもとめられたりするような、問題解決志向型で一定の規約や役割に基づきその解決を図るための集合体 (機能的社會集団)、F5.親和的对象は、共に過ごすこと、共に理解しあうこと、共に認めあうこと、共に高めあうことなどのような、共存共栄志向型で相互に望ましい安心や信頼を得るための集合体 (協和的社會集団) という概念とそれぞれ酷似しているからである。また、社会体系とは異なるが、F2.情操的对象は、個人の精神生活の向上や感性的な欲求を果たすため、F4.生命的対象は、個人の生命・生存の維持や第1次的な基本的欲求を果たすための合目的性をもったものになっている。

感情価を指標とした対象の因子構造に、もし、こうした類似する合目的性があるとすれば、対象への様々な関与のあり方のうち、主にその合目的性の側面に対して感情的評価がなされ、その上で感情イメージが形成されていると考えることができる。例えば、「勉強」という対象が、“大変だ”とか“苦痛”とかのような局所的な実感からではなく、“課題をクリアするためには必要なこと”という合目的性の観念を経た上での評定になっていて、それが「集団」「学校」などに対する評定と連動していたということを意味することになるだろう。しかしながら、感情イメージ調査では、「概念的枠組みから離れた、直観的なイメージの回答を引き出すこと (上杉, 1981)」を目的としているわけであり、質問項目のあいまいさ (感情語と対象語のみの対提示) がもたらす影響によって何に基づく感情的評価なのかが想定しにくく、かなりの程度変動しやすい性質を内包している可能性がある。今回の調査がこうであったということで、対象語についてあまりにも限定的な構造や意味を一般化するのは注意が必要である。

こうした留意をした上でだが、因子ごとの平均感情価の比較を考えると、全体で上位2位までの高い感情価を示したものがF4.生命的対象とF2.情操的对象であったということは、対象者である大学生が社会体系の中での関係よりも個人の活動系の中で対象となっているものに、よりポジティブな感情 (感情イメージ) を抱いていること

を示すものだと考えることができるであろう。おそらく、社会集団としてある対象においては、個人の望みどおりの活動や反応を得られることは比較的少なく、逆に、個人活動系の対象となっているものは、ほとんどの場合絶対的に良いものとか、選択できる自由があるものとなっていることを反映しているものと思われる。更に、男女の比較において、女性の方が、この最上位のF4.生命的対象に男性よりもポジティブな感情を抱いていることが認められており、女性がこうした対象を感情的により良く評価しているものであることが示唆されることとなった。

研究Ⅱ 尺度に基づく対象の因果論的構造

1.目的

上杉（1981，1983）は、感情価を指標とした対象語の因子分析から見出された因子を1つの尺度と考え、同一因子内に含まれる対象語の感情価の合計得点を「感情価尺度得点」として算出し、これに対して尺度（因子）間の相関係数をもとめることで、感情価に基づく対象の連関性を図的に示した。その際に、「相関係数であらわされた諸連関を、対象や事象の経験的・論理的な因果関係から、ある程度まで因果的連関として再構成することができる（上杉，1981）」とし、学生を取り巻く身近な対象における連関図（上杉，1981）では、図の左側により原因に近いものと考えられる対象として家族因子（「父」「母」「兄弟」「姉妹」「家庭」「家族」）、右側により結果に近いものと考えられる対象として、仕事因子（「仕事」「職場」）や愛情を持つペア因子（「妻」「夫」「恋人」）、そしてその中間には、生活・社会因子（「私」「生活」「学校」「社会」「友人」等）が主に配置された。

その次に、相関係数の大きさに段階的基準を設けた上で、その基準が高くなるほど線を太くしていく手続きをもって因子間を結ぶ線を引いた。これによって、上杉は、相関係数による緻密な絞り込みを経た比較的明瞭な連関図を提示することを可能にした。その結果、最も太い線によって見出されたものは、仕事因子への因果的連関が家族因

子から生活・社会因子を経由してもたらされること、愛情を持つペア因子へは家族因子から直接的に連関すること、また、生活・社会因子には、家族因子から遊び因子を経由して連関する別の経路があるということであった。上杉は、この結果を踏まえ、「諸連関の中で、その中心は、生活・社会因子であったが、最も基底的で根源と考えられるものは、家族因子である」とする考察を述べている。しかしながら、その後の研究ではこのモデル自体の検証は行われてはいない。

そこで、本研究では、上杉が相関係数から構成したこの描画モデルに比較的類似したものを、数理的で因果論的な逐次モデル（一方向パス図）として見出し得るかどうかを検証し、その適合力のあるモデルによって示される連関がどのように構成されるのかを調べることにした。

2.分析

（1）因果論的連関性の結果の方に近いものとして、対象者である学生が未体験であったり、小規模（あるいは模擬的）な体験程度しかしていないと思われるような、現時点では想像することしかできない将来的な対象を抜き出した。F1.共同体的因子では「夫」「妻」、F3.課題的因子では「仕事」「職場」、F4.生命的因子では「死」「病気」、F2.情操的因子では「文化」「芸術」「自然」を抜き出してそれぞれの合計得点を算出し、これらを将来的対象の感情価尺度得点を表すものとした。「夫」「妻」に対するものを情愛育成感情価尺度、「仕事」「職場」は協働生産感情価尺度、「死」「病気」は自律喪失感情価尺度、「文化」「芸術」「自然」は感性鋭敏感情価尺度とした。

（2）原因の方に近いものとしては、対象者である学生が密度の高い体験を過去の時点で済ませているような個人的な対象をより細分化するために、F1.共同体的因子に含まれる対象に対して、再度最尤法による因子分析を実施した。結果として、固有値の減衰率が比較的小さくなる手前であることと、まとまりの良さから3因子を抽出し、回転バリマックス解を得ることになった。累積寄与率は65.4%であり、適合度検定により因子数は有意に適合するものであった（ χ^2 値44.8，

df=25, $p=0.01$)。同一因子に含まれた「母」「家庭」「家族」は愛情で包み込んでもらう関係であることを意味した包容関係感情価尺度、「父」「私」「社会」は指導や統制を受ける関係であることを意味した統御関係感情価尺度、「兄弟」「姉妹」「親戚」「近隣」「生活」は相互に協力し合う関係であることを意味した互助関係感情価尺度と考えることができたので、それぞれの尺度得点を合計によりもとめた。これらは過去の対象の感情価尺度得点を表すものとし同列に配置した。

(3) 中間段階としては、対象者である学生が現在も最も頻繁に関与しているような対象であり、「集団」「学校」「勉強」「恋人」を構成するものに対しては適合努力感情価尺度、「生」「健康」「遊び」では活動欲求感情価尺度、「趣味」「旅」は気分高揚感情価尺度と命名した。これらの個々の尺度において合計得点を算出し、これを現在の対象の感情価尺度得点とした。

(4) 以上11尺度でパス図を作成しAmos14.0による共分散構造分析を行った。基本的には、統御関係と互助関係、包容関係における過去の対象に対する感情価が、活動欲求と親交共有、適合努力、気分高揚を必要とする現在の対象に対する感情価を経て、協働生産と自律喪失、感性鋭敏、情愛育成が予想される将来的な対象への感情価に影響を与えるものと仮定するモデルをたてた。

3.結果

(1) 共分散構造分析の結果、Figure 2.で示されているようなパスとその推定値(標準化推定値)が得られた。これらの推定値は、全て5%水準で有意であった。適合度指標は、GFI=.963, AGFI=.921, CFI=.997, RMSEA=.031となっており、十分な適合性が示された。「協働生産」へのパスは「適合努力」からのみであり、係数は0.68となっており、「自律喪失」へは「活動欲求」からのみで係数は-0.56、「感性鋭敏」へは「活動欲求」から影響を受けた「親交共有」(係数0.53)の間接的なパスと「活動欲求」からの直接的なパス(係数0.21)が成立した。また、当初は、現在の感情価尺度であると思われた「気分高揚」は、どの尺度に対しても有意なパスを出せず、「活動欲求」

からのみ影響を受けるものとなった(0.73)。「情愛育成」は、「活動欲求」からの影響を受けてはいる(0.32)が、それよりも過去の感情価尺度とした「互助関係」からより強い影響を受けていた(0.39)。また、「包容関係」からも一定程度の影響を受けるものであった(0.21)。これらの将来的感情価尺度「協働生産」「自律喪失」「感性鋭敏」「気分高揚」「情愛育成」同士の間では、相互に影響を受けるような有意なパスはなかった。

(2)「統御関係」と「互助関係」の相関係数は0.68、「互助関係」と「包容関係」では0.81、「統御関係」と「包容関係」で0.70となっており、これら過去の感情価の尺度間には、互いにかなり強い正の相関があることが認められた。これらのうち、最も数多く他の尺度へ影響を与えていたのは「互助関係」で、係数の高いものから「活動欲求」に向かうパス(係数0.60)と「親交共有」(0.48)、「情愛育成」(0.39)、「適合努力」へのパス(0.36)の4つであった。次いで数多く影響を与えていたのは「包容関係」で、「情愛育成」(0.21)「活動欲求」(0.20)の順であった。「統御関係」は「適合努力」(0.21)のみに有意な影響を与えていた。

(3) 現在の感情価尺度の中で、最も有意なパスの数が多かったものは「活動欲求」で、影響を受ける側として「互助関係」と「包容関係」の2つ、影響を与える側として「親交共有」(0.41)「情愛育成」「自律喪失」「感性鋭敏」「気分高揚」の5つで、計7つであった。次いでパスの総数が多いものは「親交共有」で、影響を受ける側で「互助関係」と「活動欲求」、影響を与える側で「適合努力」(0.32)と「感性鋭敏」の計4つであった。最後は「適合努力」で、受ける側が「統御関係」と「互助関係」、与える側が「協働生産」の計3つであった。

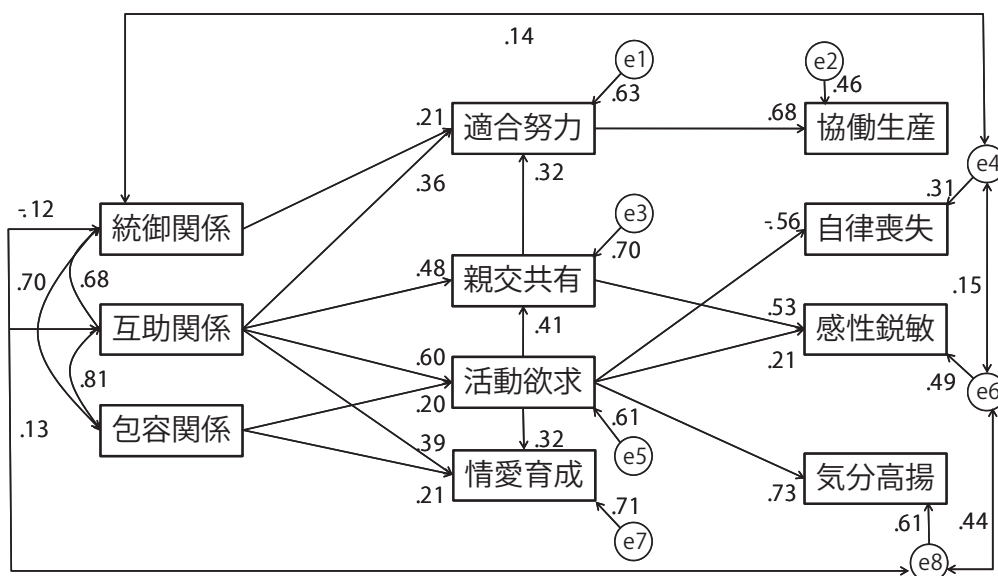


Figure 2. 感情価尺度得点間のパス図と共分散構造分析の結果(数値は標準化推定値)

4.考察

(1) 過去の感情価尺度の中で、最も数多く現在の感情価尺度に影響を与えていたのは「互助関係」における感情価であり、共同体の因子の中にあった「兄弟」「姉妹」「親類」「近隣」「生活」で構成された互助関係的な対象にプラス感情を抱くものが、「活動欲求」を主とした現在の対象に対しても広くプラス感情を抱きやすいことがわかった。したがって、これらの互助関係的な対象が、現在の対象に対する感情価を左右する最も根本的な対象であるといえるし、感情生活の直接的な土台となると考えうるだろう。上杉(1981)では、「父」「母」「兄弟」「姉妹」「家庭」「家族」の総体を根源的としたが、今回の分析においては、この家族的な総体が分離再合成されて、「親類」や「近隣」を含んだ上で3つの尺度として表されたが、「父」や「母」を含んだ感情価尺度は、現在の対象に対して直接的な影響を与えることは比較的少なく(与えていたとしても0.2程度)、そこから少し距離を置いている、あるいは親子の関係からは離れたところでの兄弟姉妹や親類近隣との付き合いを通して、そこにプラス感情を得ていることこそ、現在に直面する対象に積極的に取り組む直接的な素地(次なる対象へ向かうための準備的なプラス感情)となっていることを推測させるものとなっ

た。

(2) 現在の感情価尺度の中において、数多く他からの影響を受けたり、また他へ影響を与えたりしているのが、生命的因子を構成していた「生」「健康」「遊び」であり、活動欲求として構成されたこれらの対象にプラス感情を抱くことが、連鎖的に他の現在の対象や将来的対象にプラス感情を抱きやすいこと、また、逆に「活動欲求」にプラス感情を得るためには、統御関係を除く過去の対象の「互助関係」「包容関係」に対して、どの程度プラス感情を抱いていたのかが影響しているであろうということがわかった。したがって、この「活動欲求」に含まれる対象が、数多くの尺度について過去から未来へと仲介的につなぐことになる最も中心的対象であり、感情生活全体の動向を見るための集約的指標になると言えるであろう。上杉(1981)では、「私」「生」「学校」「社会」「友人」などの10対象を含む生活・社会の因子が中心とされることになったわけだが、今回の分析においては、これらが、やはり分離再合成されて、「生」「健康」「遊び」という対象がクローズアップされることになった。これらの対象は、社会的な体系に属するものではなく、現時点における個の健康的な生命活動を表すもので、そこにプラス感情

を得られていれば、他の現在の対象にもプラスの感情が派生し、また、間接的には社会的な将来的対象（協働生産と情愛育成）に対してのプラス感情を抱かせることになるものと推測できた。

(3) 上杉(1981)では、対象者である学生にとって本質的な将来的対象として、仕事（本研究では、「協働生産」）を重視しており、これが中心となる生活・社会の因子と連関すること、また、愛情を持つペア（夫・妻・恋人）にも連関するという2経路の連関性があることを指摘したが、今回調査では、3経路が見出されることになった。一つは、「統御関係」→「適合努力」→「協働生産」、もう一つは、「互助関係」→「適合努力」→「協働生産」、最後に、「互助関係」→「親交共有」→「適合努力」→「協働生産」であった。いずれも、「協働生産」への最終パスを「適合努力」から受けており、「集団」や「学校」「勉強」「恋人」の対象に適合しようと努力することにプラスの感情を抱くことができれば、「仕事」や「職場」に対する予期的感情に直接的にプラスの影響を与えることが推測された。そして、その「適合努力」へは、「父」「私」「社会」との関係における統制的で自己コントロール的なものにプラスの感情を抱いていることでプラスに作用するし、また、それよりも有効なのは「兄弟」「姉妹」「親類」「近隣」「生活」との関係における互助的なものにプラスの感情を抱いていることであると推測できるものとなっていた。

研究Ⅲ 感情価とパーソナリティとの関連性

1.目的

上杉(2000)は、「基底的感情としての感情イメージと基底的な行動特徴としてのパーソナリティとの関係」を調べるために、TPI（東大式パーソナリティ・インベントリ）の診断尺度を用い、感情価尺度得点および特定の対象の感情価（因子を構成する対象の感情価の合成得点）と特定の診断尺度との間に、一定の水準の相関関係があることを見出した。その中では、相対的に多くの診断尺度と関連を持つものが「社会関係」の諸対象で、特に「学校」に対する感情イメージ（感情価）が

多くの特性と関連しており、「学校」に対してプラスの感情イメージを抱く者は、パーソナリティの傾向として、積極的、社交的、意志的、陽気、活発、自己確信的、情緒安定的であるとされた。

本研究が研究対象としている感情イメージは、気分のような対象に依存しない内的状態を表すものではなく、諸対象に対する固有の感情的意味として成立するものである。したがって、この感情イメージがパーソナリティと関連するということは、特定の諸対象に対する個人の過去体験や知識だけではなく、その個人のパーソナリティ（基底的な行動特徴）特性も、対象に対する感情的意味（基底的感情としての感情イメージ）を左右するということであり、また、逆に、特定の諸対象における過去体験や知識によって得られている感情的意味が、その個人の行動特徴の一側面を助長したり固定化したりする可能性があるということを示唆するものである。

この意味において、本研究では、研究Ⅱで区分された過去のおよび現在の、将来的感情価尺度と、パーソナリティ検査における諸特性との関連性を調べ、感情イメージの成立に作用するような特定対象に対する様々な感情体験の中でどのようなアプローチ（行動）が寄与するものになるのかを、関連する行動特徴（パーソナリティ特性）から検討してみることを目的とした。

2.分析

(1) 日本版NEO-PI-Rは、因子分析的研究によって抽出された概念的モデルが具体化されており、健康的な人格面を測定する計30の特性が、①神経症傾向(neuroticism)、②外向性(extraversion)、③開放性(openness)、④調和性(agreeableness)、⑤誠実性(conscientiousness)の5つの次元に集約されるとする構造的な人格検査である。本研究では、パーソナリティの一般的でしかも比較的上位の観点からの分析を試みるために、5次元のみに照準を合わせた短縮版である日本版NEO-FFIを用いることにし、感情イメージ調査と同様記名式で実施・回収した後、マニュアルに示された採点方法に基づいて、5つの次元の得点を算出した。

(2) 過去のおよび現在の、将来的対象のそれぞ

れの時点に含まれる尺度を合計し、これを時点別の感情価総合得点として、それと5つの性格次元との相関関係を調べるために、ピアソンの積率相関係数をもとめた。次に、個別の感情価尺度得点と、同じく5つの性格次元との相関を同様にして確認をした。

3.結果

(1) Table 5. に性格5次元のスコアと感情価尺度得点との相関係数を示した。これによると、5つの性格次元は、もれなく、いずれかの時点での尺度と有意な相関を示していたことが認められた。時点別に見ると、過去の感情価総合得点では、最も絶対値の大きい値を示したものが、“調和性”であり($r=.46$)、次いで“外向性”(36)、“神経症傾向”(36)であり、開放性と誠実性には有意な相関は認められなかった。現在の感情価総合得点では、絶対値の大きい順に、“調和性”(46)、“外向性”(37)、“神経症傾向”(35)となっており、過去のものと同様に、開放性、誠実性に有意な相関は認められなかった。最後に、将来的感情価総合得点では、“調和性”(38)、“神経症傾向”(29)、“開放性”(28)、“外向性”(18)、“誠実性”(18)の順になっていて、全てが有意な相関であった。3時点を通じて1番強い相関を示していたのは調和性で、相関係数.38～.46までの比較的強い正の相関を示していたこと、また、過去と現在では、外向性が相関係数.36～.37までの比較的強い正の相関、神経症傾向が相関係数-.35～-.36までの比較的強い負の相関を示していて、3つの性格次元が同様の順で関連性の強さを示していることがわかった。

(2) 以上とは別に、個別の感情価尺度ごとに性格5次元との関連を見てみると、過去の対象の中で、“神経症傾向”と最も強い負の相関を示した対象が「統御関係」であること(-.46)、“調和性”とでは「互助関係」が最も強かった(.44)。他の特徴としては、やや弱くはあるが「統御関係」のみ“誠実性”と有意な正の相関を示していることがわかった(.22)。現在の対象の中では、“神経症傾向”と「適合努力」の負の相関が最も強く(-.34)、“調和性”とでは「活動欲求」が最も強かった(.48)。

他、やや弱いものではあるが「適合努力」のみが“誠実性”と有意な相関を示していることが認められた(.17)。最後に、将来的対象の中では、“神経症傾向”との負の相関が最も強かった対象は「協働生産」であり(-.27)、“調和性”とは「情愛育成」が最も正の相関が強かった(.43)。他に特徴的なことは、ここでも、やや弱い“誠実性”と「協働生産」との間に有意な正の相関が認められたこと(.23)と、更に、他の時点にはない特徴として、「感性鋭敏」「気分高揚」「情愛育成」と「開放性」の性格次元に、一定程度(.17～.29)の正の相関があることであった。

Table 5. 性格5次元のスコアと感情価尺度得点との相関係数

	神経症傾向	外向性	開放性	調和性	誠実性
過去の対象	-.36	.36	.09	.47	.16
統御関係	-.46	.37	.10	.41	.22
互助関係	-.30	.34	.09	.44	.11
包容関係	-.24	.30	.04	.41	.11
現在の対象	-.35	.37	.06	.46	.13
適合努力	-.34	.34	.13	.37	.17
親交共有	-.32	.33	-.01	.41	.16
活動欲求	-.28	.29	.10	.48	.01
将来的対象	-.29	.18	.28	.38	.18
協働生産	-.27	.30	.15	.33	.23
自律喪失	.00	-.23	.02	-.30	-.07
感性鋭敏	-.20	.14	.29	.35	.11
気分高揚	-.12	.10	.27	.40	.03
情愛育成	-.24	.21	.17	.43	.08

※網掛けをしている部分は、5%水準で有意な相関を示したものの

4.考察

(1) 諸対象に対する感情価尺度全てに正の相関（但、「死」「病氣」の自律喪失とは負の相関）があった性格次元が「調和性」であったことから、「調和性」が比較的高い者は、いずれの諸対象に関してもポジティブな感情を抱く傾向にあることがわかった。調和性の特徴は、基本的に利他的、援助的であり、対象の反応や状態に対応していくことをいとわないことを示している。だとすれば、対象に対して無理なく柔軟に合わせていくことで、比較的継続的に良い関係や状態を保つことができるようになり、ポジティブ感情を成立させやすい体験や知識を得ることが可能になるものと予見しえた。したがって、諸対象と調和していくことが、ポジティブ感情に対して循環的な作用をもたらすための重要なアプローチの一つとなっていることが示唆されるものと思われる。

また、「外向性」も「気分高揚」「感性鋭敏」の情操的对象を除く全ての諸対象に正の相関（同、自律喪失とは負の相関）があり、「外向性」が比較的高い者は、内的状態に注意を向ける「気分高揚」「感性鋭敏」を除いて、どの対象に関してもポジティブな感情を抱く傾向にあることがわかつ

た。外向性の特徴は、基本的に社交的、活動的であり、関心を自身の内面よりも外面に向けやすいことを示している。それ故に、対象に対して積極的に働きかけることは比較的容易にできるものと思われ、新しい側面で関係を開始したり、あるいは改善の必要な関係を修復したりする良い機会に恵まれやすいので、ポジティブ感情につながるものと推測できる。

更に、「神経症傾向」は「自律喪失」「気分高揚」を除いた全ての諸対象に負の相関があった。これは、「神経症傾向」の比較的低い者は、誰でも心乱れるような興奮や驚愕を経験するであろう「自律喪失」「気分高揚」を除き、ポジティブな感情を比較的多くの対象に持つ傾向にあることを表していることになる。神経症傾向の特徴は、不安定的、非制御的であり、これが低ければ、自身を安定させ自己コントロールができる状態におけるので、対象に対して落ち着いて対処することができるであろう。このことは、関係の在り方に流されず、一定程度の自己を保つことが、対象に対するポジティブ感情を得るためには必要となることを意味しているのかもしれない。以上、3つの性格次元が、対象に対するポジティブ感情を得るための共

通の行動（性格）基盤になるものと考えられた。

（2）時点別、あるいは個別に見た場合に注目されるのは、まず過去の対象である「統御関係」において“神経症傾向”との負の相関（-.46）が、他の対象に比べて最も強かったことである。この「統御関係」は「私」「父」「社会」で構成されており、自己に安定をもたらす性質がこうした対象にポジティブな感情を抱く傾向にあるとともに、これらの対象とポジティブな感情が抱けるような関係性を形成することができていれば、自己の安定が得られるということも意味していると思われる。この意味からすると、自己の安定に関連する「統御関係」が、「互助関係」という根本的对象を、側面的に支えるために必要な対象となると考えることもできることになる。

次に特徴的なのは、現在的对象である「活動欲求」が、“調和性”との相関において最も強かったことである（.48）。第2位は過去の対象の「互助関係」であった（.44）。共分散構造分析でこの後者の「互助関係」から出るパスの係数が最も大きいのが前者の「活動欲求」へのパスであることと考え合わせると、少なくともこのライン（互助関係→活動欲求）が“調和性”とかなり関係していることを推測させるものとなり、「互助関係」の中で得られたポジティブ感情が、その関係の性質上、“調和性”というパーソナリティ特性を補強し、その“調和性”が生命的な特徴を示す「活動欲求」にポジティブ感情を付与する重要な要因となることを想定することも可能となった。

また、上記の「活動欲求」から出ていた4つのパスの中で、「感性鋭敏」「気分高揚」「情愛育成」の3つが、唯一“開放性”と一定程度の正の相関を示した（.17～.29）ことが認められたが、これは、“開放性”の比較的高い者は、「芸術」「文化」「自然」や「趣味」「旅」「夫」「妻」に対してポジティブ感情を抱く傾向にあることを示している。開放性の特徴は、積極的な想像性や審美眼的感覚、内的感受性が強いことであり、これが高ければ、多種多様な好奇心を持つことができると思われる。そうであるならば、社会的な規範等が想定されない限りにおいて、新奇さに驚くことをむしろ楽しむような状態になり、これらの将来的で、比較的未

知な対象に対して、ポジティブ感情を成立させやすくなっているものとも推測できる。

最後に、社会的に重要である将来的対象として、「協働生産」が取り上げられるわけだが、共分散構造分析で直線的な連関が認められた「統御関係」→「適合努力」→「協働生産」のいずれも、更には、これらは全体の中では唯一“誠実性”と一定水準の正の相関を示している（.17～.23）ことがわかった。このことは、“誠実性”の比較的高い者は、「私」「父」「社会」の「統御関係」や課題的对象である「勉強」「学校」「集団」「恋人」そして将来的な「仕事」「職場」に対してポジティブな感情イメージを持つ傾向にあることを示唆している。誠実性の特徴は、意志的、計画的であり、これが高ければ、目標に対して着実に前進できるように思われるものである。仕事などの社会的に望まれる生活にポジティブに参加していくためには、この誠実性を伴っていることが必要とされ、また、与えられた課題を果たしていく過程で得られた体験や知識にポジティブな感情イメージを抱くことができれば、誠実性というパーソナリティ特性を補強、あるいは形成していくことができることを予見するものと考えることができた。以上、社会的対象に対峙するものとしては誠実性、個人の活動に対峙するものとしては開放性が、それぞれのポジティブ感情を得るための個別の基盤になることを示唆するものになった。

Appendix 1. 今回調査での対象語ごとの感情価の男女別重み付け(対象語との男女別主因子解より符号の方向を統一したもの)

対象	全体 (N=156)								男性(N=77)								女性 (N=79)							
	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌
私	.24	-.08	.26	-.24	-.83	-.76	-.71	-.79	.49	-.04	.48	-.18	-.79	-.82	-.68	-.82	.75	.53	.79	.23	-.22	-.10	-.22	-.34
父	.65	.38	.72	.06	-.49	-.58	-.51	-.69	.55	.40	.69	.00	-.72	-.58	-.64	-.62	.68	.33	.76	.09	-.44	-.57	-.43	-.76
母	.55	.34	.46	-.22	-.59	-.70	-.79	-.72	.51	.34	.43	-.34	-.72	-.80	-.87	-.83	.62	.43	.57	.02	-.40	-.57	-.73	-.61
夫	.23	.14	.25	-.38	-.84	-.68	-.75	-.75	.18	.15	.31	-.40	-.89	-.73	-.80	-.66	.29	.15	.21	-.35	-.78	-.62	-.71	-.85
妻	.77	.49	.70	.03	-.53	-.28	-.41	-.51	.69	.50	.72	.01	-.64	-.37	-.44	-.53	.78	.42	.65	-.03	-.53	-.28	-.44	-.55
兄弟	.66	.40	.69	-.04	-.67	-.66	-.58	-.56	.74	.47	.76	-.03	-.66	-.68	-.60	-.54	.50	.21	.47	-.16	-.76	-.76	-.67	-.67
姉妹	.54	.52	.72	-.03	-.63	-.66	-.69	-.54	.43	.45	.69	-.10	-.71	-.62	-.66	-.57	.64	.62	.76	.03	-.54	-.67	-.68	-.49
恋人	.56	.39	.70	.08	-.51	-.57	-.66	-.75	.59	.41	.73	.04	-.56	-.68	-.62	-.83	.51	.41	.64	.17	-.47	-.43	-.72	-.63
友人	.57	.52	.49	-.05	-.73	-.72	-.79	-.72	.70	.75	.54	-.12	-.71	-.70	-.76	-.64	.49	.38	.48	-.01	-.74	-.72	-.80	-.77
仲間	.47	.39	.47	.04	-.69	-.70	-.73	-.82	.68	.50	.49	.04	-.76	-.61	-.72	-.78	.28	.30	.44	.02	-.64	-.80	-.75	-.87
家族	.77	.57	.69	-.03	-.65	-.71	-.69	-.78	.75	.55	.69	-.13	-.77	-.77	-.75	-.84	.80	.60	.71	.08	-.54	-.63	-.65	-.71
家庭	.58	.45	.65	.09	-.81	-.80	-.72	-.63	.51	.53	.68	.10	-.80	-.92	-.75	-.60	.65	.42	.64	.10	-.81	-.67	-.73	-.67
親類	.17	.23	.36	-.37	-.67	-.76	-.77	-.77	.41	.52	.60	-.27	-.49	-.68	-.81	-.64	.01	.00	.15	-.46	-.75	-.81	-.75	-.83
近隣	.51	.26	.47	-.11	-.49	-.51	-.60	-.64	.36	.00	.36	-.49	-.51	-.56	-.70	-.82	.27	.18	.26	-.08	-.61	-.66	-.74	-.44
学校	.65	.45	.30	.16	-.56	-.77	-.62	-.78	.72	.57	.46	.18	-.60	-.76	-.48	-.72	.57	.30	.11	.09	-.54	-.79	-.75	-.86
集団	.69	.44	.68	.05	-.54	-.68	-.54	-.72	.70	.18	.73	.04	-.49	-.68	-.53	-.65	.68	.61	.65	.12	-.58	-.65	-.57	-.76
職場	.66	.60	.49	.30	-.28	-.27	-.24	-.51	.58	.67	.46	.17	-.33	-.34	-.34	-.53	.71	.53	.48	.37	-.27	-.25	-.16	-.52
社会	.43	.20	.30	-.10	-.69	-.60	-.51	-.73	.50	.13	.20	-.29	-.61	-.57	-.62	-.77	.54	.56	.62	.25	-.57	-.48	-.34	-.53
仕事	.61	.50	.33	.28	-.61	-.41	-.54	-.59	.61	.65	.52	.31	-.48	-.35	-.45	-.60	.52	.29	.04	.17	-.75	-.53	-.71	-.63
勉強	.69	.65	.59	.38	-.56	-.35	-.48	-.58	.67	.69	.62	.28	-.69	-.55	-.48	-.61	.71	.58	.61	.52	-.44	-.11	-.42	-.57
生活	.68	.48	.46	.13	-.73	-.44	-.61	-.61	.71	.46	.44	.01	-.73	-.52	-.59	-.80	.69	.49	.50	.27	-.70	-.42	-.59	-.52
遊び	.50	.54	.37	.24	-.65	-.61	-.68	-.74	.54	.65	.36	.40	-.62	-.52	-.63	-.72	.50	.45	.35	.09	-.70	-.74	-.73	-.76
趣味	.63	.52	.28	.01	-.73	-.78	-.66	-.82	.67	.52	.33	.09	-.73	-.85	-.68	-.79	.58	.51	.22	-.05	-.74	-.73	-.67	-.84
旅	.58	.44	.23	.32	-.66	-.54	-.66	-.61	.81	.57	.56	.47	-.46	-.37	-.49	-.51	.40	.38	-.12	.17	-.79	-.72	-.74	-.66
健康	.80	.56	.05	-.10	-.60	-.47	-.49	-.63	.83	.81	-.02	-.04	-.57	-.44	-.43	-.74	.54	.26	.06	-.25	-.71	-.61	-.62	-.73
病気	.54	.59	.12	.30	-.55	-.57	.06	-.66	.51	.53	.24	.36	-.60	-.64	.06	-.69	.54	.57	.06	.16	-.54	-.43	-.02	-.70
生	.73	.55	.69	.23	-.52	-.40	-.55	-.68	.77	.68	.74	.32	-.42	-.35	-.50	-.62	.68	.42	.64	.13	-.60	-.47	-.63	-.75
死	.64	.65	.36	-.16	-.63	-.39	-.13	-.58	.62	.47	.57	-.45	-.60	-.31	-.24	-.64	.72	.83	.27	.06	-.60	-.39	.01	-.48
文化	.32	.32	.42	.34	-.24	-.47	-.42	-.51	.40	.49	.53	.57	-.27	-.55	-.52	-.50	.24	.09	.36	.32	-.26	-.37	-.26	-.53
芸術	.73	.67	.61	.57	-.13	-.20	-.17	-.51	.57	.69	.38	.49	-.29	-.48	-.56	-.61	.30	.13	.16	.26	-.59	-.84	-.50	-.52
人類	.54	.44	.44	-.02	-.66	-.54	-.57	-.63	.49	.57	.60	.04	-.60	-.65	-.58	-.51	.19	.02	-.04	-.26	-.80	-.61	-.68	-.81
自然	.31	.16	.34	.03	-.74	-.35	-.53	-.70	.37	.23	.44	-.03	-.79	-.43	-.50	-.65	.28	.13	.39	.12	-.70	-.27	-.51	-.73

結 び

本研究は、イメージ調査法によって得られた対象語に対する8感情語の連関性をもとに、これを重みづけとして用いた「感情価」という指標によって、32対象のいずれかを構成要素として有する尺度を因子分析の結果から作成し、この連関を因果論的にモデル化すること、そして、感情価尺度と上杉（2000）が用いたものとは異なるパーソナリティ検査との連関性から、イメージ調査法の妥当性に新たな確証を与えるとともに、因果論的モデルに基づいた説明可能性を検討するものであった。

以上の目的は、概ね達成されたものと思われる

が、それ故に、次の点に留意しておきたい。確かに、対象語と感情語の漢字を対提示しただけの漠然としたイメージを扱った項目でありながら、上杉によって定式化された方法を用いて算出した感情価は、かなりの程度意味であることはわかってきた。尺度を構成するための因子分析のまとまりの良さ、内部連関ではありながら因果論的に再構成されたモデルに適合性があること、特定のパーソナリティ特性と特定の対象に対する感情価との間に連関があることなどは、更なる外的妥当性、対象語や感情語の拡張、感情イメージ調査法のテスト化へと研究を展開していけることにもなるだろう。しかしながら、この感情価を算出する際の重みづけには、未だに不確定な要素がある。なるほど、諸対象に共通する一般的な感情イメージの構

造は、経年格差による心配はなく安定していた。直近の年代ともなれば、その構造はかなり安定することも示唆された。だが、感情価の重みづけは、実際には男女別の32対象ごとの因子分析の負荷量が使われている。これについての有意味性や安定性、変動性については検討されてきていない現状にある。

今後は、感情価を基礎づけるためのこれらの問題点にも十分な検討・考察を加えたい。

参考文献

- Cornelius, R.R. The Science of Emotion : Research and tradition in the psychology of emotions Prentice-Hall, Inc 1996
- Izard, C.E. 比較発達研究会訳 感情心理学 ナカニシヤ出版 1996
- Frijda, N.H. The Psychologist's Point of View. In Lewis, M., Haviland-Jones, J.M. (Eds.), *Handbook of Emotions : Second Edition*, New York : The Guilford Press, Pp.59-74 2004
- Plutchik, R. The multifactor-analytic theory of emotion Journal of Psychology 50 153-171 1960
- 上杉喬・佐々木正宏 カード式投影法による感情因子の基礎研究 『体験と意識に関する総合研究』 第1集 文教大学人間科学研究会 15-19 1979
- 上杉喬・佐々木正宏 「俳画的箱庭」における感情投影の基礎研究 — 試論 — 『体験と意識に関する総合研究』 第2集 文教大学人間科学研究会 95-99 1980
- 上杉喬・松尾春代 「図式的投影法」による家族認知の基礎研究 『体験と意識に関する総合研究』 第2集 文教大学人間科学研究会 100-104 1980
- 上杉喬・水島恵一 図式的投影法による学生の意識研究 『体験と意識に関する総合研究』 第3集 文教大学人間科学研究会 106-204 1981
- 上杉喬 感情イメージの研究 人間科学研究 第3号 22-38 1981
- 上杉喬 感情イメージの研究（Ⅱ）— 労働場面

- における感情イメージ — 人間科学研究 第4号別冊 29-40 1983
- 上杉喬 感情イメージの研究（Ⅲ）— 労働場面における感情イメージの諸関連 — 人間科学研究 第5号別冊 11-20 1984
- 上杉喬 感情イメージの研究（Ⅳ）— 対象による違いと性による違い — 人間科学研究 第11号 1-11 1989
- 上杉喬 感情イメージの研究（Ⅴ）— SD法による感情イメージの検討 — 人間科学研究 第20号 68-77 1998
- 上杉喬・鈴木賢男 感情イメージの研究（Ⅵ）— 感情価とパーソナリティ特性との関連 — 生活科学研究 第22号 121-132 2000
- 水島恵一 実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ — 「体験と意識」に関する個別・総合プロジェクトに向けて 文教大学紀要 第12集 1-11 1978
- 水島恵一 「体験と意識」研究の方法論 『体験と意識に関する総合研究』 第1集 文教大学人間科学研究会 1-8 1979
- 水島恵一・上杉喬 編 イメージの基礎心理学 誠心書房 1983
- 鈴木賢男・大石昂・松野真・堀内正彦・鈴木国威・藤森進・岡田斉 『感情イメージ調査』についての研究 — 年代を経た大学生においてみられた感情イメージ構造の安定性 — 人間科学研究 第30号 121-131 2008
- 下仲順子・中里克治・榎藤恭之・高山緑 日本版 NEO-PI-R, NEO-FFI使用マニュアル 東京心理株式会社 1999